

1872年3月26日横浜発サンフランシスコ行き、 アメリカ号日本人渡航者の調査

— 先行研究発表後四半世紀の関連研究成果のまとめ —

塩 崎 智

Research on 50 Japanese Passengers on the Trans-Pacific Ship
Leaving Yokohama on March 26, 1872 for San Francisco,
with an Overview of Academic Development for
a Quarter Century on Studies of Japanese Students
Studying in the United States in the Early Meiji Era

Satoshi SHIOZAKI

要 旨

1872年、日本人が大半して欧米に留学した。米国へは横浜発サンフランシスコ行き直行船便が月1本の割合で就航していた。3月の船便アメリカ号には、いつもよりはるかに多い50人の日本人が乗船していた。横浜で発行されていた英字週刊新聞に、船客リストが掲載されているが、英語表記の日本人名から正確に姓名を判別するのが難しいケースが少なくない。この難業にかつて挑戦した先学がいる。その研究結果は素晴らしいものであったが、いくつかの課題を残した。本稿は、約25年間で飛躍的な発展を見せた、日中米の研究者による関連分野の研究成果を駆使してその課題を解決し、同時に四半世紀間の研究の進歩を示す試みである。

キーワード：1872年、日本人米国留学生

はじめに

幕末維新时期に渡米した日本人留学生研究は、個々の学生や集団に関する日米の史料調査が進み、次々に新史実が明らかにされてきている^①。

筆者は、ここ数年、日米の新聞史料を始めとする一次史料を活用、照合し、日本人留学生の正確な渡航記録と留学先の把握に尽力してきた。1860年代、1870年代の渡米日本人に関しては、データがほぼ集まった。このマクロなデータを公開する前に、1872

年3月26日横浜出航のアメリカ号に限ったマイクロなデータとそれに基づく分析、考察結果を発表する。

このアメリカ号には、50人という、岩倉使節団に次ぐ、当時では最多レベルの人数の日本人が乗船していた。彼等の氏名は、今から25年程前に西岡淑雄による研究で明らかにされた。しかし、その後の研究により、追加或いは修正すべき点が出てきた。本稿では、四半世紀にわたる研究の成果を示しつつ、今後の研究のパイロット・スタディとして、主に留学生の渡米後の就学先に関する情報、史料を提供したい。

西岡淑雄による先行研究

西岡淑雄は、自分が所属している日本英学史学会の大先輩であり恩師の一人でもある。西岡の研究は、史料活用の妙にある。一般の研究者が目をつけにくいニッチなテーマに着眼し、他の研究者があまり活用しない史料に基づいて研究を進めた「個性的」研究者と言える⁽²⁾。

西岡は、生前、明治時代に横浜で出版発行されていた英字週刊紙、*ジャパン・ウィークリー・メール* (*Japan Weekly Mail*, 以後、*JWM*とする)は史料の宝庫だと語っていた。その学究的関心が結実したのが、「太平洋郵船と英学史」(1992年)、「明治五年二月十八日横浜発のアメリカ号で渡航した留学生たち」(1993年)である⁽³⁾。

*JWM*には、横浜発着の太平洋航路の船客リストが掲載されていた。西岡は早くから、このリストに「変な」綴りで書かれていた日本人の氏名に関心を持っていた。幕末維新時は、ヘボン式といった日本語の英語表記の基準がなかったため、日本人の姓名が、筆記した者が耳で聞き取った音を英語化した表記で綴られている。綴りからすぐに確定できる名前もあれば、まったく見当がつかない名前もある。西岡は、当時入手し得る史料を使って、アメリカ号の日本人船客約50人のほとんどの氏名を突き止めた。

西岡によって確定された日本人船客の氏名（西岡リスト）

以下は、1993年までに西岡によって確定された日本人船客の分類と、氏名、基本情報である。英語アルファベット表記は*JWM* (1872年4月6日)に書かれていた綴りである。()内の情報は西岡によるものに筆者が加筆した。

(1) 華族の留学生（6人、随行、同行を含む）

- ① Matzudira 松平忠和（21歳、旧島原藩主、15代将軍徳川慶喜の弟）行先サンフランシスコ
- ② Shebukawa 澁川勝迪（生没年不明、元島原県大参事）行先同

- ③ Enoeya 井上三四郎（生没年不明，旧島原藩士）行先同
- ④ Simoora 千村五郎（1835年から1838年に生 — 1891年或いは1903年没，旧開成所教授，松平一行の通訳として随行か？）行先同
- ⑤ Karahashi 唐橋在定（生没年不明，公家）行先同
- ⑥ Ozich 大関増勤（20歳，旧黒羽藩主）行先ニューヨーク

(2) 開拓使派遣の留学生（16人，うち米国11人，欧州5人）

【米国派遣】行先ニューヨーク，（ ）内最後は専修予定分野

- ① Kudo Seichiro 工藤精一郎（17歳，東京出身，農業）
- ② Saisho Chohachi 税所長八（17歳，薩摩藩出身，農業）
- ③ Ichike Sosuke 市来宗介（24歳，薩摩藩出身，農業）
- ④ Saiyo Kikuyso 西郷菊次郎（13歳，薩摩藩出身，農業）
- ⑤ Tokuno Siuzuro 得能新二郎（13歳，薩摩藩出身，農業）
- ⑥ Sibayama, Yahuchi 柴山矢八（22歳，薩摩藩出身，農業）
- ⑦ Ooyama Seichi 大山助一（15歳，薩摩藩出身，鉱山業）
- ⑧ Murata Yuzo 村田十蔵（14歳，薩摩藩出身，鉱山業）
- ⑨ Sameshima Takanosuko 鮫島武之助（23歳，薩摩藩出身，鉱山業）
- ⑩ Yamato Sechinozu 大和七之丞（17歳，長州藩出身，鉱山業）
- ⑪ Sedo Sinoozu 志道新之允（18歳，長州藩出身，鉱山業）

【欧州派遣】行先パリ，リバプール

- ⑫ Yenomoto Keicotaro 榎本彦太郎（20歳，フランス派遣，静岡藩出身，鉱山業）行先パリ
- ⑬ Yamakuchi Keicozso 山口彦次郎（17歳，フランス派遣，薩摩藩出身，農業）行先パリ
- ⑭ Myachi Kanichiro 宮地堅一郎（23歳，ロシア派遣，土佐藩出身，農業）行先リバプール
- ⑮ Hemura Ziro 江村次郎（20歳，ロシア派遣，長州藩出身，農業）行先リバプール
- ⑯ Kiebura Nihe 桐原仁平（22歳，ロシア派遣，長州藩出身，農業）行先リバプール

(3) 三井家の青年たちの留学生（7人）行先ニューヨーク

- ① B. Mitzea 三井弁蔵（高景，23歳，小石川家）
- ② T. Mitzea 三井武之助（高尚，18歳，北家）

- ③ Takidgero, Mizea **三井貞次郎** (高悠, 21 歳, 小石川家)
- ④ C. Mizea **三井長四郎** (高棟, 16 歳, 北家)
- ⑤ J. Mizea **三井養之助** (高明, 17 歳, 小石川家)
- ⑥ K. Yosheoka **吉岡常太郎** (三井家史料によると吉太郎, 20 歳, 三井家手代, 北家)
- ⑦ S. Noyori **野依周吉郎** (28 歳, 三井家手代, 小石川家)

(4) 公務出張の官員 (4 人) 行先ニューヨーク

- ① Yoshida **吉田清成** (27 歳, 薩摩藩出身, 大蔵少輔, 薩摩藩英国, 米国留学生時代変名, 永井五百助)
- ② Minami **南保** (26 歳, 出身不明, 吉田随行, 大蔵少録)
- ③ Honda **本多晋** (27 歳, 旧幕臣, 吉田随行, 租税権中属)
- ④ Otori **大鳥圭介** (39 歳, 旧幕臣, 吉田随行, 開拓使五等出仕, 大蔵少丞)

(5) 勸農寮からの留学生 (14 人) 行先ニューヨーク

この 14 人は, *JWM* には 14 Japanese students と書かれていて名前が記載されていなかったが, 西岡は, 太政類典に書かれている, 明治五年二月の諸職業留学生 14 人の名前を当てている。氏名と () は, 主に『国際人辞典 幕末・維新』p.622 参照。() 内最後は, 専修予定分野。

- ① **由良 守応** (46 歳, 紀州藩出身, 大蔵省勸農助, 兼宮内省御用掛, 牧畜)
- ② **山沢 静吉** (18 歳, 薩摩藩出身, 牧畜)
- ③ **井上幾太郎** (17 歳, 長州藩出身, 鑛物)
- ④ **吉田 慶蔵** (16 歳, 薩摩藩出身, 鑛物)
- ⑤ **田代静之助** (27 歳, 薩摩藩出身, 農業)
- ⑥ **入江音次郎** (21 歳, 米国留学中病死, 長州藩出身, 染物)
- ⑦ **白根 鼎蔵** (21 歳, 長州藩出身, ガラス製造)
- ⑧ **赤羽 四郎** (19 歳, 会津藩出身, ガラス製造)
- ⑨ **梶山 鼎助** (21 歳, 長州藩出身, 織物)
- ⑩ **柳井 謙蔵** (18 歳, 長州藩, 織物)
- ⑪ **山本 弥三** (21 歳, 長州藩, 塗物)
- ⑫ **小谷 静二** (21 歳, 薩摩藩出身, ガラス製造)
- ⑬ **池田猪之助** (19 歳, 薩摩藩出身, メリヤス)
- ⑭ **平沢 太助** (生没年等不明)

以上47人以外に、JWMの乗船者リストに書かれているOno, Sedzuma, Momotokeの3人に関しては、西岡は、「小野と静間のいずれかまたは両方は大関の随行者であり、百武(?)は吉田たちの随行者であったと推測して後考を俟ちたい」と、むすびで書いている⁴⁾。合計すると、西岡によれば、計50人の日本人が横浜で乗船したことになる。

アメリカ号乗船日本人リストの確定

西岡の研究から自分が導き出した課題は2点ある。まず、日本人船客の人数は50で正しいのか。これは、西岡が勸農寮派遣留学生14人に入れたが、JWMに名前が無い平沢太助の扱いに関わってくる。次にOno, Sedzuma, Momotokeの3人の人物の確定である。

このアメリカ号に乗船していた日本人名に関しては、日本側では、乗船していた①吉田清成と②三井家一行が、米国側では③サンフランシスコの現地紙Altaが貴重な情報を提供してくれている⁵⁾。吉田は日本人全員49人の名前を記し、三井家は総計人数を51人としてそのうち38人の名前を挙げている。Altaの記事では、合計49人の日本人名が書かれ、吉田のservantを含めると計50人となっている。

この3つの史料と西岡リストを照合してみると次のようになる。

1. 平沢が現れるのは西岡リストのみである。
2. 三井家一行の人数は、西岡リスト、三井家リスト、Altaでは7人である。吉田リストだけ6人である。吉田リストが間違いで7人とする、吉田リストの合計人数は50人となる。
3. 西岡リスト、Altaには無い高木貞作が、吉田リストと三井家リストに含まれている。サンフランシスコ現地紙のサンフランシスコ・クロニクル(San Francisco Chronicle)には、一行が宿泊したGrand Hotelの宿泊客(4月18日泊)リストがあり、Sogoi Keyorari, Yoshida, Japan; Otori; Mirami; Honda; Takaiと書かれている⁶⁾。このTakaiがおそらく高木だろう。Altaに書かれている吉田のservantはこの高木と考えられる。
4. 三井家リストには、大関増勤の従者に瀬谷小次郎ではなく、滝水次郎という名前が出ている。この名前は他の史料には出てこない。滝水ではSedzumaとは音的に全く合わない。他の史料でも大関の従者は瀬谷となっているので、滝水は間違いで瀬谷が正しいと思われる。原史料には当たっていない。

以上1-4の情報を総合すると、平沢はこの船では渡米せず、高木が吉田と渡米、三井家は7人ということになる。つまり合計50人である。

次の課題は、Ono, Sedzuma, Momotokeの確定である。詳細は後述するが、以下が答えとなる。

- ・Ono 宿毛藩出身の**小野梓**（1852-1886）である。早稲田大学の前身、東京専門学校の創始者の一人として知られる。
- ・Sedzma おそらく大関の従者の**瀬谷小次郎**（1848-没年不明）で、彼の別名かと思われる。
- ・Momotoke 大阪の商家から派遣された**百武安二郎**（ヤスノスケ、生没年不明）である。

以上から、西岡リストは次のように修正される。

(1) 華族の留学生 8 人（随行、同行を含む）

松平一行：松平，澁川，井上，千村 計 4 人（うち千村のみ米国で修学）

大関一行：大関，瀬谷，小野，唐橋 計 4 人

(2) 開拓使派遣の留学生 16 人（うち米国 11 人）

(3) 三井家の青年たちの留学生 7 人

(4) 勸農寮からの留学生 13 人

(5) 公務出張の官員 5 人

(6) 単独（百武）1 人

計 50 人（うち米国 42 人）

各グループの渡米後の動向

各グループの渡米後の動向を、主に、西岡の研究以降に発表された史料を使って示したい。米国経由欧州最終目的地の留学生は本稿では扱わない。

(1) ① 松平一行

西岡によると、**松平忠和**一行はシカゴで**千村**と別れ、渡欧。帰りはリバプールを出て米国経由で 1873 年 10 月にサンフランシスコから日本への帰途についた。約 1 年半の外遊だった。

千村五郎は西岡によると、シカゴで**松平一行**と別れて、その後の行方が不明だが、1873 年 3 月にサンフランシスコを出航し日本に帰国した。約 1 年弱の海外滞在となる。

千村に関しては、西岡も参照している茂住實男の研究が詳しい⁽⁷⁾。**千村**は自分が開いていた英語学校を人に任せて、大名に付いてシカゴに留学し、1 年の滞在後、病気で帰国したことが、史料から明らかにされている。茂住はこの大名を確定していなかったが、おそらく島原藩の**松平忠和**であろう。

筆者が知る限りでは、幕末維新期にシカゴで学んでいた日本人留学生はいない。しかし、オハイオ州シンシナティ・デイリー・ガゼット（*Cincinnati Daily Gazette*, 1872 年 4 月 5 日）とニューヨーク・イブニング・ポスト（*New York Evening Post* 同日）

1872年3月26日横浜発サンフランシスコ行き、アメリカ号日本人渡航者の調査に次のような記事がある。

Mr. John C. Hill, of the Theological Seminary at Chicago, is expecting the arrival of 6 Japanese boys during the present month, to be placed under his care as students. (*New York Evening Post*)

日本人留学生6人が4月中にシカゴに来て、セオロジカル・セミナリー・アット・シカゴでジョン・ヒルの個人指導を受ける予定だという内容である。

松平一行がサンフランシスコに着いたのが4月18日である。シンシナティとニューヨークの新聞の記事は一行が太平洋航海中(4月5日)に掲載されたので、この記事のニュースソースがよく分からない。松平一行は4人なので6人という人数は合わないが、一行は大陸横断鉄道に乗り、シカゴに4月下旬には着くことになる。

茂住によると、千村は渡米時に宣教師カロザース(Christopher Carrothers, 1839-1921)の紹介状を持参していた。二人は東京で聖書研究を通して知り合った。

カロザースはシカゴにある現マコーミック・セオロジカル・セミナリー(McCormick Theological Seminary)を1869年に卒業後、妻を連れて来日し、年内に東京に私塾を開校した^⑧。

このシカゴ訪問予定の6人の日本人留学生の一人が千村であるならば、シカゴの神学校とは、カロザースの母校である、マコーミック神学校の前身、当時のプレズビテリアン・セオロジカル・セミナリー・シカゴ(Presbyterian Theological Seminary, Chicago)ではないだろうか。

茂住によると、千村は私費留学生であったが、帰国時に、日本で官費留学生と同様の英語の帰国試験を受験するよう要請され、それを断った。理由は、学科未熟としている。しかし、帰国の約1年後、1874年7月にキリスト教の受洗試問を受けている。彼がシカゴで何を学んだかは、これで明らかである。

② 大関増勤一行

大関増勤は、現在の栃木県にあった黒羽藩第16代藩主だった。黒羽藩関連の史料によれば、大関は側近の瀬谷小次郎を連れて行ったので、西岡が特定できなかったSeszumaが瀬谷に当たると考えられる^⑨。綴りと音の一致という点では無理があるが、Alta リストには、小野、大関、瀬谷の順番で名前(Mr. Sedzuma)が記されているので、この3人は同じグループの可能性が高い。

宿毛藩出身の小野梓は1870年に上海に渡航し西洋留学の志を得て、帰国後1871年春頃から横浜の修文館で宣教師ブラウンから英語を習い、パーレーの『万国史』の翻訳に

励んでいた、という⁽¹⁰⁾。大関は、出航前の横浜滞米中ブラウンの世話になったので、大関と小野はブラウン繋がりだった可能性が高い⁽¹¹⁾。大関は小野の英語力とその留学欲を買って、留学1年分と渡航費用を提供するという条件で小野を同行者にスカウトしたと考えられる。

大関一行は、渡米後、マサチューセッツ州で学んでいたことが、史料から判明している⁽¹²⁾。

コネチカット州都ハートフォードのデイリー・クウラント (*Hartford Daily Courant*) 1872年6月5日によると、大関、唐橋、瀬谷、小野、児玉の5人がマサチューセッツ州イーストハンプトン (Easthampton) の学校に最近入学した。つまり、1871年9月から6月の年度の最後に、ぎりぎりで入学したということだろうか。

Five Japanese have recently entered the Easthampton, Mass. seminary as students. Their names are Ono, Ouseki, and Karahashi from Yeddo, Kodama from Sadowara, and Seya from Samotsakie.

この学校は、荒船の研究から、ウィリントン・セミナリー (Williston Seminary) という私立アカデミーであることが分かっている。

児玉は佐土原藩留学生の児玉次郎 (章吉, 1846-1907) で、1870年9月に横浜を出航し、すでに米国で1年半ほど過ごしている。渡米後、コネチカット州ニューヘイブンのイェール大学図書館司書のアディソン・ヴァン・ネーム (Addison Van Name) の家にホームステイし、1872年初頭、ウィリントン・セミナリーに入学した⁽¹³⁾。

大関一行がどのような経緯で児玉の学校に来たのかは不明である。ちなみに同校の卒業生には、札幌農学校の初代校長 (1876-1877年) を務めた、ウィリアム・S・クラーク (William S. Clark, 1826-1886) がいる⁽¹⁴⁾。

1872年5月に発行された、*School Catalogue* (*Thirty-first annual catalogue of Williston Seminary*) によると、1871年9月~1872年6月の年度の English Class に Ziro Kodama, Sadowara, Japan の名前が見える。大関ら4人は早くても1872年4月末の入学だっただろうから、同年5月発行の *School Catalogue* 掲載に間に合わなかったのだろう。

この5人がなかなか優秀な学生であると賞賛した記事が、オハイオ州都シンシナティ・デイリー・タイムズ (*Cincinnati Daily Times*) の1872年7月12日付の紙面に出ている。

The Young Japanese Students.

A correspondent of the *New York Commercial*, giving an account of the exercises of the graduating class at Williston Seminary, thus speaks of the proficiency of the Japanese students:

I must not omit a complimentary mention of the young Japanese who are pursuing a course of study in this place. They are five in number, the most notable among them named Kodama, who is said to be a prince of high blood, so high that he cannot consent to much familiarity with his fellow-countrymen, which fact would seem unfavorable to much cheerfulness of disposition; but the students from Japan appear to be very happy and contented, whatever the embarrassments of the situation. In regard to their proficiency in study, I am pleased to be able to speak most favorably, and on competent authority.

Though Kodama has been in the United States only a year and a half, his handwriting is excellent and he reads and speaks English very well. All are thorough students, who have evidently come to this country for a purpose, and are working for it with all energies directed to a single object. Of their diligence and determination no better evidence was needed than during the recent intolerably hot nights, at which time their chamber windows were always illuminated far into the small hours, and the poor fellows could be seen tirelessly at work with brain and book, the fan meanwhile plied with utmost vigor.

Similar accounts come from the Japanese at Amherst, Monson, &c. Americans must watch these young men. Their mission to this country, and to seats of learning throughout the enlightened world, means something. They are destined to exert an influence upon the old effete nations of the Orient in the years to come, and perhaps such as few have ever imagined or dreamed of.

(ほぼ同じ内容の記事が、メイン州ポートランドの地元紙、*Portland Daily Press* の8月3日付で掲載されている。同記事では、学校名が Williston Seminary ではなく Williams College となっている。)

米国の学校では、当時、卒業時に在學生や卒業生の英作文朗読を公開していた。ウィリントン・セミナリーを訪問した記者が、見玉を筆頭に、日本人留学生5人の英語力と

その勉強に対する熱誠な姿勢に驚いたという内容の記事だ。

児玉以外には個人名は挙げられていないが、**小野**も日本である程度の英語力を身につけていたので、記者に好印象を与えた可能性はある。

そして、記者にもう一人、名前は書かれていないが英語力で好印象を与えた可能性があるのが、**大関**随行の**瀬谷小次郎**だ。栃木県の史料によると、**瀬谷**はヴァーモント州ミドルベリー (Middlebury) の学校とウィリントン・セミナリーで学んだという⁽¹⁵⁾。ミドルベリーには1800年に設立されたミドルベリー・カレッジ (Middlebury College) があるが、**瀬谷**が学んだのが、この大学だったのか、附属のグラマー・スクールだったのか、そして期間はいつだったのかは不明である。前出の新聞記事から考えると、ウィリントンが先でミドルベリーが後の可能性が高い。

瀬谷は福澤に英語を学び、渡米前からすでに黒羽作新館で英語と数学を教えていたというので、船上で3週間、米国で3か月、意識高く英語を学んでいれば、それなりの英語力が付いていただろう。

日本人留学生5人うち3人の英語力が高ければ、記者にも5人全員の英語力が高いという印象を与えることができた。

コネチカット州ノーウィッチのオーロラ (*Norwich Aurora*) の1872年9月25日の紙面、同じくコネチカット州ミドルタウンのデイリー・コンスティテューション (*Daily Constitution*) の1872年9月21日の紙面には、**大関**一行が、ウィリントン・セミナリーで下宿しながら学んでいる様子を示す記事が出ている。

Four of the Japanese students at Williston Seminary board with Landlord Hill. Each wished a separate room, but were told he should have to put two in a room, unless one was sick. The boys are bright and soon they take their cue, and Mr. Hill received the following note, which is verbatim et literatim, et punctuatim:

Dear Mr. Hill: Mr. Seye has a sick & he cannot lay down together Mr. Ouseke in the same bed, therefore he want a other bed. May he get it? Ono

この記事では、日本人留学生が4人となっているが、おそらく児玉が抜けたからだろう⁽¹⁶⁾。**瀬谷**が病気になったので、**大関**が同じベッドで寝るわけにはいかない、どうか**大関**のために別のベッドを用意してくれないか、と**小野**が手紙で学校関係者に頼んでいる⁽¹⁷⁾。

大関はやがて病気になり、滞米1年ほどで**瀬谷**と帰国するが、スポンサーを失った**小野**は、ニューヨーク市の隣のブルックリンに単身移動し、ジョンソンという人物から法

1872年3月26日横浜発サンフランシスコ行き、アメリカ号日本人渡航者の調査学の個人指導を受けた。小野は1873年夏頃までブルックリンに滞在し、イギリスに留学の場を移した。

小野は1872年の10月か11月に、イギリスに留学していた同郷の宿毛藩出身の伊賀陽太郎（1851-1897）に、イギリスの議会政治について書かれた *How are we governed* という英書を送ってくれるように頼んでいる⁽¹⁸⁾。小野がジョンソンという米国人と共に読んでいた本の1冊かもしれない。この本に関連した内容と思われるが、小野は、滞米中、ニューヨークとシカゴの新聞に、*How we ought to be governed* という題の英文を寄稿したという⁽¹⁹⁾。

唐橋に関しては、史料が発見できていない。

(2) 開拓使派遣の米国留学生 11 人

開拓使派遣留学生に関しては、井上高聡が2019年に、その派遣意図に関する論考を発表している⁽²⁰⁾。井上によると、開拓使は1871年2月から1872年3月までの間に4グループに分けて留学生を派遣した。総勢33人は、同時期の官費留学生の約20%を占めていた。開拓使は留学生を積極的に派遣した役所ということになる。

アメリカ号乗船の16人は4番目の最後のグループになる。彼らの派遣目的は、元来、技術習得や視察だったが、実際には開拓使長官黒田清隆が薩摩藩出身だったこともあり、薩摩藩出身の有力者の子弟に海外体験をさせる機会として利用されていたのではないかと井上は推測している。

各自の渡米後の就学先を見ると、判明した例によれば、彼らは英語習得のために初等・中等教育の学校に入り、明治政府が決定した留学生の一斉帰国命令により、大半が1874年3月までに帰国した。この辺りの事情も西岡が簡単にまとめている。足掛け2年弱の留学は、英語学習と海外体験で終わったと言える。

サンフランシスコに上陸し、米国に留まった11人は、開拓使の大鳥圭介が引率していた。大鳥は吉田清成の随行員の一人であったが、一人二役を担当していた。一行11人は、サンフランシスコ上陸後、吉田一行よりも早めに鉄道で東部に向かった。

以下、史料が見つかった例について渡米後の様子をまとめる。

薩摩藩出身の市来宗介、西郷菊次郎、村田十蔵は、西郷の伝記資料によると、相談して、船客にいた米国人老宣教師に、毎日午前9時から11時まで英語を教わっていた⁽²¹⁾。サンフランシスコに到着して3日後には、首都ワシントンに向けて大陸横断鉄道に乗る。ワシントンDCでは、薩摩藩留学生で1年前から米国で学んでいる、大久保利通の二人の息子、大久保彦之進（利和、1859-1945）と仲熊（牧野伸顕、1861-1949）に会った。公使館で紹介してもらった薩摩藩留学生の高橋新吉（1843-1918）に連れられて、3人は大久保利通の2人の息子とともに、フィラデルフィアに移動した。

西郷菊次郎（渡米時 13 歳）は西郷隆盛が奄美大島流刑中に現地で生まれた子供で、明治二年から鹿児島県の西郷家で養育された。フィラデルフィア郊外のジョンという牧師の家に寄宿し、ジョンが校長を務める、生徒数 6, 70 人の初等教育レベルの学校に入学し、ジョンの息子や娘とともに学んだ。1874 年 2 月 6 日横浜着のアラスカ号で帰国している。この船で一緒に帰国したのは、**税所、市来、得能、大山、志道、村田、柴山**であることを西岡が確認している。

村田十蔵（岩熊，同 14 歳）は、高橋新吉と大久保利通の 2 人の息子が学んでいた、ウエスト・フィラデルフィア（West Philadelphia）のマントゥア・アカデミー（Mantua Academy）で学んだ可能性が高い⁽²²⁾。

得能新二郎（同 13 歳）は、1873 年 3 月 14 日に森有礼が書いた手紙によると、ペンシルバニア州の、フィラデルフィアの西方にある、ウエスト・チェスター（West Chester）という町の学校に、土佐藩出身の旧海援隊士、菅野覚兵衛（1842-1893）と一緒に学んでいる⁽²³⁾。

税所長八（同 17 歳）は、薩摩藩留学生田尻稻次郎（1850-1923）に連れられて、**市来**とともに、1872 年 5 月 3 日に薩摩藩留学生折田彦市を訪ねている⁽²⁴⁾。当時、折田は、ニュージャージー州ミルストーン（Millstone）の牧師、コーウィン（Edward Tanjore. Corwin, 1834-1914）の家でホームステイし、1872 年 8 月まで、大学入学に必要な科目の個人指導を受けていた⁽²⁵⁾。

税所は夏休の間は、折田とともにミルストーンにいたようだ。1872 年 10 月には、マサチューセッツ州ウエスト・ニュートン（West Newton）にあった、ジョゼフ・アレン（Joseph Allen）が経営する学校 The West Newton English and Classical School で学んでいたことが分かっている⁽²⁶⁾。

大半が薩摩、長州藩出身者の中で、**工藤精一郎**（同 17 歳）は東京出身である。グリフィスによると、**工藤**は、渡米時は、英語は全く使えなかったが、1872 年 6 月から折田とともに、ミルストンのコーウィン宅でホームステイし、1874 年 8 月までコーウィンの個人授業を受けていた⁽²⁷⁾。

工藤は 1874 年 9 月にラトガーズ大学の古典学部に入學し、1878 年 6 月に卒業した。1870 年代、ラトガーズ大学で学んでいた日本人留学生は大半が 3 年制の科学部の学生だった中で、古典学部を卒業した日本人留学生は珍しい。帰国後、1881 年から 1883 年まで札幌農学校に奉職したので、開拓使派遣留学生としてふさわしい道を歩んだと言える。

志道新之允（18 歳）と**柴山矢八**（22 歳）は、後述する三井家一行の**三井貞次郎**のニューブランズウィックの葬式（1873 年 1 月 14 日）に参列していたので、その頃、ニューブランズウィック周辺かフィラデルフィア周辺で学んでいた可能性がある⁽²⁸⁾。

当時から、ニューヨーク、ニューブランズウィック、プリンストン、フィラデルフィアの4都市は鉄道でつながっていた。ミズトンとニューブランズウィック間も当時は鉄道が通っていた。それぞれの都市間のアクセスは良好だった。

工藤や税所と親しかった折田は1873年中、200通近くの手紙を日本人宛に書き、ほぼ同数の返信を受け取っていた。その中で頻繁にやり取りしていた相手の中に、工藤、税所、柴山、鮫島の名前が含まれている⁽²⁹⁾。1874年に折田が親しく交際した学生の中には、工藤、山沢静吾、田代静之助、井上（幾太郎？）の名前があがっている。山沢、田代、井上は後述する勸農寮派遣留学生である。1875年に交流があった学生には、工藤と田代の名前が含まれている⁽³⁰⁾。

鮫島武之助（23歳）は、渡米前から大阪で何礼之に、その後、慶應義塾で英語を学んでいた（明治二年二月二六日入塾⁽³¹⁾）。前出の折田の日記によれば、1872年6月はニューブランズウィックで多くの薩摩藩出身者と過ごしていたようだ。英語歴と年齢から、渡米後どこの学校で何を学んでいたのか知りたいところだが、今のところ史料が無い。帰国後、東京外国語学校の教壇に立っている。1874年4月頃、米国から帰国したようだが、帰国後行方不明という記事が東京日日新聞（1874年4月23日）に見える。

大和七之丞（17歳）は、帰国日が1874年3月4日（『幕末維新海外渡航者総覧』）という情報しかない。

大山助一（15歳）は西郷等と1874年2月6日に帰国するが、1885年、1891年にも渡米し、人物像彫刻の分野で活躍する⁽³²⁾。1872年の米国留学体験が、後世の活躍にどのような影響を与えたのか知りたい。

市来宗介（24歳）は、年齢からすると、どこかで個人指導を受けていた可能性が高い。帰国後は西南戦争で戦死した。

(3) 三井家派遣留学生（7人）

一行7人に関しては、随行の野依、吉岡が渡米中に日本に送った書簡も含め、詳細な研究書が1988年に出版されている⁽³³⁾。西岡は未見だったようだ。当時の留学は士族出身者が中心で、商人はあまり例が知られていなかった。現在もそうだが、幕末維新留学生研究は、士族出身者中心になる傾向があり、この史料も存在が知られていなかったかもしれない。以下、主にこの史料に依拠して述べる。

三井家は当時からすでに日本を代表する商家の一つで、明治政府の大隈重信、渋沢栄一、井上馨等から、銀行設立のために、一族の若手を欧米に留学させるよう要請を受けた。この政府からの働き掛けあつての留学生派遣だった。

三井家から大蔵省に出された留学願いには、「3～5年アメリカ合衆国のニューヨークまたはサンフランシスコで実際的な修行に励ませ、銀行の創設方法から現場の仕事のや

り方を見聞の上、三井の銀行事業に貢献させたい」旨が書かれていた⁽³⁴⁾。

三井家子弟5人に加えて、付添として、吉岡と野依が派遣されたが、この二人もまた銀行業務勉強のための留学生でもあり、米国では子弟とともに学校で学んだ。

一行7人は、吉田清成一行としばらくサンフランシスコに滞在を続け、市内の工場や学校を見学していた。5月4日に、武之助、長四郎、吉岡の3人は吉田一行とサンフランシスコを出て総勢14人で東部へ向かった。ニューヨーク着は5月11日である。

残り3人と野依は貞次郎が体調を崩したためサンフランシスコに残り、5月18日に同地を出発し、ニューヨークに5月25日に着いた。一行7人がそろったところで、27日、長州藩留学生国司健之助（生没年不明）が迎えに来て、留学先のニュージャージー州ニューブランズウィックへと向かった。

『幕末維新渡航者総覧』によると、武之助、長四郎、養之助は、京都欧学舎出身となっている。3人は明治三年十二月に開校した京都府中学校で開校時から、週6日、毎日2時間英語を学んでいた。自ら進んで入学したわけではないようだが、渡米までに1年程は英語を学んでいたことになる⁽³⁵⁾。

現地では、吉田清成の指示で、ラトガーズ大学附属グラマー・スクール（Rutgers College Grammar School）が受け入れの準備をしてくれている。校長のライリー（Dewitt T. Reily）宅が寮のようになっていて、そこで生活し通学する予定だったが、まだ学期中で部屋に空きがなく、すぐには7人揃って入れず、体調がすぐれなかった貞次郎と野依が入った。校長の寮には、17、8人の米国人寄宿者に加え、岩倉の子息の龍小次郎（岩倉具経、1853-1890）、ニューヨークに迎えに来た国司健之助、長州藩留学生原保太郎（1847-1936）、同服部一三（1851-1929）等がいたというので、英語が通じないという不便もなく賑やかな環境だっただろう。

当時の米国の大学やグラマー・スクールはキリスト教色が濃厚で、朝起きると礼拝、食前食後にお祈りがある。入寮後早速、祈り、勉強、運動の規則正しい日々が始まったようだ。

学校が6月下旬に終わり夏休に入ると、7人揃って校長の自宅の寮に入ることができた。夏休みは服部一三の案内で、8月にニューヨーク州北方の避暑地キャッツキルに行き登山などを楽しんだ。

9月は学校が始まり、7人揃ってグラマー・スクールに入学した。日本の小野組をはじめとして、商人の欧米留学が増えつつあるとの情報も入り、勉強のモチベーションも高かった。学校以外にジョンソン（ジョンソン？）という家庭教師も雇っていた⁽³⁶⁾。

1873年に入ると、体調不良が続いていた貞次郎が、医師や周囲の必死の介抱の甲斐なく1月9日に息を引き取った。病名はTyphoid Fever（腸チフス）とされている⁽³⁷⁾。

貞次郎の葬儀は、1月12日に行われた。大学側から3人、生徒約50人などが棺も含

1872年3月26日横浜発サンフランシスコ行き、アメリカ号日本人渡航者の調査
めて馬車8台に分乗して行進した。日本人の参列者は次の名前が書かれている。

服部市三，吉雄（大蔵省官員），原保太郎，井伊直助（西京為替会社），服部敬二郎，
小川，永井，大塚，錦小路，大沢，松平，**志道**，**柴山**

先述のように，**志道**と**柴山**はアメリカ号に同船していた開拓使派遣留学生である。
1873年1月時点で，当校あるいはその周辺地域で学んでいた日本人留学生名を示す貴重
な史料である⁽³⁸⁾。

貞次郎の遺体は，ニューブランズウィックにあった日本人留学生の墓地に埋葬するの
ではなく，日本の家族のたつての希望で，鉄道と船で日本に運ぶことになった。この移
送を頼まれたのは，当時帰国が近づいていた**由良守応**だった。由良もアメリカ号で共に
渡米し，船内で知り合った仲である⁽³⁹⁾。後述するが，三井側と**由良**との手紙のやり取
りから，1873年4月頃，**由良**はフィラデルフィア（ヘヤドリヘヤ）にいたことが分か
る⁽⁴⁰⁾。馬の買い付けなどをしていたようで，勸農寮派遣としての仕事を実践していた。
貞次郎の遺体は5月25日に横浜に着いた。

もう一人，体調が思わしくなかった**養之助**は，1873年7月6日にニューブランズウィッ
クを出て先に帰国した。残った5人は勉強を続けたが，2年目の1873年9月に入って，
弁蔵と**野依**はクラスが上がらなかった。このままでは銀行で研修するのもいつになるか
分からない状況でもあり，明治政府から留学生の一斉帰国命令が出たこともあって，日
本の三井家から帰国要請が来た。

最後くらいは，別々に生活するということになり，1873年11月から**武之助**が同じニュー
ジャージー州のエリザベス（Elizabeth）で40人くらいの学校に移った。**長四郎**は吉岡
と一緒に，その近くのローウエイ（Rahway）のウィリアム家に移り，John Dwight
という教師に指導を受けた。残りの二人はニューブランズウィックのライリー校長家で
勉強を続けた。この後5人は，1874年6月中頃にサンフランシスコを出航して日本に
戻る⁽⁴¹⁾。

(4) 勸農寮からの留学生（13人）

日本の西洋の知識，技術の導入は，法学，軍事，工業などに焦点が当てられがちだが，
明治政府は西洋農業，手工業等の実業の技術，知識導入も積極的に行っていた。

この勸農寮派遣留学生はその一つの現れである。彼らの専攻分野は農業，ガラス，織
物，染色，造酒となっており，様々な分野での積極的な知識，技術導入を意図していた
ことが分かる。留学期間は2年である。

西岡によると，**池田**，**小谷**，**吉田**，**山沢**，**田代**の5人は，約2年の留学を終えて1874

年5月28日に横浜に戻っている。これとほぼ時を同じくして、**山本**、**柳井**、**井上**、**白根**の4人は、1874年6月6日横浜着のグラナダ号で帰国している。

一行に関する詳細な研究はまだ無いが、國雄行の『近代日本と農政』（2018年）には、概略、次のように記されている⁽⁴²⁾。

この留学生派遣を政府に上申したのは、時の大蔵省大輔の**井上馨**と**少輔の吉田清成**である。輸入頼りだった農牧業と飲食料の製造業を国内に導入するため、技術伝習目的で17人を米国に派遣することになった。実際にこの時米国に派遣されたのは13人である。**吉田**は、この勸農寮派遣留学生の引率も兼ねていたことになる。

農牧業のうち農業では、化学や地質学といった近代的農学を学ばせることが目的だったようだ。この任務を担っていたのは**田代静之助**だという。一方、牧畜修業として派遣されたのは、**由良守応**と**山沢静吉**だった。ただし、國は、**田代**と**山沢**の米国での伝習の詳細と帰国後の足取りはつかめていないという。

國によれば、留学生達はサンフランシスコ到着後各地で伝習を開始したようだ、ということだが、筆者は、一行の米国での伝習に関しては懐疑的である。

彼らが実際に実業の訓練に従事していたかどうか、可能な範囲内で検証してみよう。

赤羽四郎（ガラス製造）、**入江音次郎**（染物）、**白根鼎蔵**（ガラス製造）の3人は、最初の1、2か月間だけだが、それぞれ、Shiro Akabane, Hiroyoshi Erea, Teyzo Siraneの名前で、マサチューセッツ州ウースター（Worcester）のハイランド・ミリタリー・アカデミー（Highland Military Academy）という、各自の専門分野とは全く関係の無いミリタリースクールに、1871年9月～1872年6月の年度に籍を置いている⁽⁴³⁾。**赤羽**は、2年間のブランクの後、1874年9月にイェール大学科学部に進学した⁽⁴⁴⁾。**入江**は、1873年3月20日にニューヨーク市で死亡し、**三井貞次郎**の遺体が一時的に安置されていた、ニューブランズウィックの日本人墓地に葬られた。**白根**に関しては情報が無い。

薩摩藩出身の**山沢静吉**（静吾、牧畜）は、元々陸軍大尉だったが、牧畜研究のため勸農寮から派遣されている。留学先は不明だが、1874年5月に帰国後は陸軍に戻り、その後フランスに派遣された⁽⁴⁵⁾。

池田猪之助（メリヤス）は、マサチューセッツ州のモンソン・アカデミー（Monson Academy）で1871年9月～1872年6月の年度を英語科（English Department）で、1872年9月～1873年6月と1873年9月～1874年6月までの年度を古典科（Classical Department）で学んでいる⁽⁴⁶⁾。池田がモンソンで英語を学びながら繊維関係の指導や研修に参加していたという情報は見当たらない。

吉田慶蔵（鑛物）は**吉田清成**の甥（nephew）で、1872年9月～1873年6月の年度をモンソン・アカデミーで個人指導、1873年9月～1874年6月の年度を英語科で学ん

1872年3月26日横浜発サンフランシスコ行き、アメリカ号日本人渡航者の調査
でいる⁽⁴⁷⁾。きっちり2年間英語を学んで帰ってきた。吉田慶蔵も鉾山について学んだ
形跡は無い。

小谷静二（ガラス製造）はおそらくKODANIと発音するのだろう。詳細は不明だが、
1872年9月16日付と、9月23日付の森有礼（当時、駐米公使）からモンソン・アカデ
ミーのハモンド校長宛の手紙に登場する⁽⁴⁸⁾。

I have received a letter from Mr. S. Kodani in relation to a certain deposit of
money which is in some bank in your neighborhood under your care. Mr.
Kodani informs me that sometimes since wishing to draw the money from the
bank he wrote to you in regard to it, and that his application was refused. I
am under the impression that Mr. Kodani has misunderstood the facts in the
case and I beg that you will relate them particularly to me for explanation to
the young man. As I believe that Mr. Kodani is anxious to change his resi-
dence, I shall be glad to hear from you as soon as it may be convenient. (9
月16日)

小谷の学費をハモンド校長が管理しているのだが、小谷がお金を要求しても拒否され
たと森に苦情を述べたのだろう。森はハモンドに、小谷は誤解しているようだから、お
金の件を説明してやってくれないかと頼んでいる。そして小谷は引っ越しを切望してい
る。モンソン・アカデミーの校長が小谷の面倒を見ているということは、小谷は当時、
モンソンかその周辺におり、モンソン・アカデミーに入学する準備をしていたか、専門
のガラス製造に関する勉強をしていたことになる。

Your letter of the 19th instant was received on Saturday last. Its explanations
are ample and in every way satisfactory. I regret that you have had so much
trouble in regard to Mr. Kodani and I beg that you will accept my thanks for
your care of and attention to his interest. As Mr. Yoshida and General
Williams are still abroad and as there is no prospect of their immediate return,
I have determined to charge myself with the responsibility of looking after the
interests of Mr. Kodani for the present. I will thank you to send the money
deposited for the use of Mr. Kodani to this Legation in a check drawn payable
to my order. (9月23日)

ハモンド校長が小谷に関する状況を森に丁寧に書いてきたのだろう。小谷が相当な迷

惑をハモンドにかけたようなので、米国から渡英中の吉田清成が戻るまで、森が、小谷のお金の件の面倒を見る、ということだろうか。

若い日本人留学生はお金の使い方に慣れていなかったのが、現地の米国人や年長者の日本人留学生が留学費用を預かり、必要に応じて渡すことになっていた。小谷の留学費用はハモンド校長が預かっていたようだが、小谷がモンソン・アカデミーで学んだ記録は無い。

田代静之助（農業）は、帰国日が1874年5月28日となっているが、吉田清成の書簡の中には、1875年に田代がワシントンDCの日本公使館の仕事を手伝いながら勉強している様子を伝える記述がある⁽⁴⁹⁾。前出の折田彦市の日記も、1875年には田代はまだ米国にいることを示している。

山本弥三に関する情報は無い。

以上見てきたように、國の『近代日本と農政』における記述同様、ここでも、勸農寮派遣留学生が、米国で実業教育に勤しんでいる様子は確認できなかった。唯一、派遣目的を実践していることが分かったのが由良守応である。

一行の引率的存在だった由良はすでに40代半ばだったので、学校で英語を学ぶプロセスは踏まなかった。

由良に関しては、歴史小説、郷土研究も含めて、岩倉使節団とともに渡航し、米国、英国、フランスを経て、大久保利通等と帰国したことになる⁽⁵⁰⁾。『木戸孝允日記』には、ワシントンDC、イギリス、フランス滞在中に、由良来訪の記述が見られるという⁽⁵¹⁾。

由良が、岩倉使節団とは別に渡米したことは、今回の調査結果で間違いない。岩倉使節団がサンフランシスコに到着したのが1872年1月15日である。由良は約3か月遅れで渡米し、米国で岩倉使節団と行動を共にした可能性はある。しかし、使節団の公式記録である米欧回覧実記には由良の記述はほとんど無い⁽⁵²⁾。

木戸孝允の日記によると、由良は1872年5月14日に、中島政之助とともに、ワシントンDCに木戸孝允を訪問している。この日、吉田清成、大鳥圭介等十数人も木戸を訪問したという⁽⁵³⁾。

米国側の史料によると、由良はボストンで日本人留学生の面倒を見ていた両替銀行家ギルバート・アトウッド（Gilbert Attwood）を1872年6月27日に訪問している⁽⁵⁴⁾。Nakajimaという日本人が同行していたというので、これも中島政之助だろう。同じ牧畜専門の山沢の名前は同行者として出てこない。岩倉使節団本体のボストン滞在は、6月17日から20日までで、22日にはワシントンDCに戻っている。

おそらく、由良は、岩倉使節団本体とは別行動で、中島のような英語が堪能な日本人を連れて、米国各地で情報収集をしていたのだろう⁽⁵⁵⁾。その後、岩倉使節団と共に英

国に向かったかどうかは不明だが、由良も英国、フランスを訪問した。

國によると、由良は一八七二年八月に渡英し、スコットランドを巡回、翌一八七三年四月にサンフランシスコに到着し、五月に帰国したという⁽⁵⁶⁾。三井家一行の書簡では、由良は1873年4月頃、米国フィラデルフィア周辺で馬を見て回っていた。由良はフランスから米国東岸に戻って、サンフランシスコから帰国したことは間違いない。

三井家一行のところで触れたが、由良は三井貞次郎の遺体とともに1873年5月27日に日本に帰国した。この時の記事が、「欧州各国で牛馬等を研究し帰朝」（『新聞雑誌』1873年6月）、「諸外国で購入した牛馬を連れ帰朝」（『横浜毎日』1873年5月28日）に見える。牛馬合わせて数十頭を太平洋航路で運んで来た由良は、牧畜研究という目的をしっかりと果たして帰国したと言える⁽⁵⁷⁾。

一行13人のうち薩摩藩出身が5人、長州藩出身が6人で、藩閥出身者が11人を占める。しかも、個々の留学生が任された実業習得の場と思えるような学校は一つも明らかになっていない。まずは、英語の習得ということで一般の学校に通ったのだろうが、開拓使派遣留学生と同じように、薩摩・長州藩出身の子弟の、特に目的の無い留学というのが実態だった可能性が高い。

参考までに、彦根藩派遣の留学生、武藤精一（1844-不明）は1868年に渡米し、ニューヨーク州中部にある繊維工業が盛んなユティカ（Utica）で、羅紗工場で技術伝習を受けていた⁽⁵⁸⁾。まず英語を学んでから技術を学ぶのであれば、当初の予定の2年では短すぎる。自らが留学生だった吉田清成には自明のことだったはずだが。

(5) 大蔵省派遣吉田清成一行（5人）

吉田清成は、外債募集のために大蔵省から米国に派遣された。吉田の経歴を簡単にまとめておく。

吉田は薩摩藩が1865年に英国に派遣した留学生の一人で、主に経済的問題により1868年に森有礼等と渡米し、ニュージャージー州ニューブランズウィックのラトガーズ・カレッジ科学部に入学した。翌1869年、ラトガーズ大学を退学し、マサチューセッツ州ウイブルラムにあったメソジスト系の私立アカデミー、ウエズレイヤン・アカデミー（Wesleyan Academy）に転校し、1870年には同じメソジスト系のウエズレイヤン大学（Wesleyan University）に移った。

この頃、吉田は外務省から、日本人留学生を代表して現地で各留学生に学費を渡す係を任されていた。そのこともあり、彼が米国東部の日本人留学生と活発に手紙をやり取りしていたことが分かっている⁽⁵⁹⁾。

しかし、落ち着いて勉学に打ち込む間もなく、1870年に大蔵省からの派遣でニューヨークを訪れた薩摩藩出身の上野景範（1845-1888）の目にとまり、英国に同行するこ

とになった。1871年2月に帰国すると大蔵省出仕が待っていた。**吉田**は、一つの教育機関にじっくり腰を据えて長期間学ぶ余裕はなかったが、現地で発掘された逸材ということになるだろうか。当時の留学生の中で、順調にエリートコースを歩んだ一人と言える⁽⁶⁰⁾。

サンフランシスコに着き、早速外債募集の交渉を開始したが、状況は芳しくなく、5月4日にサンフランシスコを出て5月11日にニューヨークに着く。すぐにワシントンDC滞在中の岩倉具視に呼び出され、5月14日にワシントンに入った。結局米国では罫が明かず、6月にはイギリスへ渡った。米国滞在は2か月弱ということになる。

吉田に同行した、**南保**、**本多晋**に関しては情報が無い⁽⁶¹⁾。

桑名藩出身の**高木貞作**は、**南**、**本多**、**大鳥**と異なり、大蔵省等の肩書が史料に記されていないことから、特別な待遇で随行を許されたのではないだろうか。

高木に関しては、出身地の桑名市のHPに経歴が掲載されている⁽⁶²⁾。以下、その情報の概要をまとめる。数奇な人生を送ったようだ。

1848年桑名出身。戊辰戦争に会津若松で桑名藩軍として参加する。その後、桑名藩軍が庄内で降伏したが、**高木**は桑名に戻らず、箱館にいる旧桑名藩主松平定敬を訪問した。箱館では、新選組とともに、最後の五稜郭の戦いに参戦し敗北。1869年に東京へ船で護送されて、身柄は桑名藩に引き渡された。

その後のことは明確ではないが、桑名には戻らず、1870年に渡米する。いったん帰国して、1872年に大蔵省派遣留学生として、**吉田清成**とともに再び渡米。アメリカでは商業学校で運上所（税関）事務を学び、1875年に帰国し、森有礼らとともに、商法講習所（現在の一橋大学）の創立に参加し、助教授として商業簿記を講義した。その後、銀行業に入り、第十五国立銀行（現在の三井住友銀行の前身の一つ）、横浜正金銀行（現在の三菱UFJ銀行）に勤め、1892年から2年間、ニューヨーク出張所主任を務めた。

3年間商業学校で事務を学んだとあるが、これは、ニュージャージー州ニューアーク（Newark）にあったブライアント・ストラットン・アンド・ホイットニー・ビジネス・カレッジ（Bryant, Stratton and Whitney Business College）である。同校のホイットニー校長（William C. Whitney, 1827-1894）は、日本の商法講習所で教壇に立つことになる。このニューアークの学校では、仙台藩留学生富田鉄之助が1870年12月から1872年3月頃まで学んでいた。富田と**高木**は入れ違いのような形で、一緒に同校で学んだことはなかった。

高木は**吉田一行**と共にワシントンDC、イギリスに行かず、ニュージャージー州ニューアークで留学生生活を送ったと思われる⁽⁶³⁾。東京日日新聞（1875年5月15日）によると、この少し前に帰国し、商法を教える学校を開く予定と書かれている。

大鳥圭介は、榎本武揚、そしておそらく高木貞作とともに函館五稜郭に立てこもり、最後に降伏した佐幕派の一人で、4年間の入牢を経て明治五年正月に無罪放免となったばかりだった。その後開拓使出仕となったが、大鳥を米国に連れていくのは、新政府内でも複数の反対意見があった。出発の3日前に最終的に決定されたという⁽⁶⁴⁾。

吉田清成一行は、本質的に、官僚の派遣団だったが、高木は、それに同行した留学生と考えるとよいだろう。

(6) 個人参加 (1人)

百武安二郎(生没年不明)は大阪の商人(大坂伏見町平野屋、大阪を代表する両替商の一つ)から派遣されていた⁽⁶⁵⁾。百武は三井家一行とともに東部へ向かっている⁽⁶⁶⁾。米国側の史料によると、百武は、1873年には、吉田清成が一時学んでいた、マサチューセッツ州ウイルブラハムのウエズレイヤン・アカデミーで学んでいた。ちなみに、福知山藩主の息子の朽木綱鑑(生没年不明)もこの学校で学んでいた⁽⁶⁷⁾。

百武の名前が出てくる米国側史料はもう一つある。森有礼がサンフランシスコの日本の領事代理、ホーレス・ダン(Horace D. Dunn, Acting Consul of Japan San Francisco)に宛てて書いた手紙(1872年9月10日付)は百武にふれている⁽⁶⁸⁾。

Your letter of the 31st of August enclosing a communication for Mr. Momotake Yasunosuke has been received. I will do what is possible to forward the communication to its destination, but the vague character of the address does not warrant the belief that the success will be assured.

この手紙の前に、ダンから百武について森に書いた手紙は1872年8月31日付で、百武が三井一行と東部に移動してから随分日経っている。百武は、何かトラブルがあって早々に帰国するためにサンフランシスコに戻ってきていたのだろうか。

三井家派遣留学生と百武、さらには、三井貞次郎の葬儀に参列していた。井伊直助(西京為替会社)等、商家が派遣した留学生の存在も無視できない。

終わりに

近年、インターネットを使って国境を越えた情報収集が容易になり、西岡が研究していた25年前には発見、入手できなかったような史料、論文が、自室にいたまま入手できるようになった。本稿の目的の一つは、その進歩の様子を示すことにある。

まず、西岡の研究成果と今回の調査結果を比べてみよう。

- (1) 西岡は50人のうち47人の姓名を発見した。今回の調査で、47人のうち1人は間違いで、西岡リストには無い4人の名前を追加し、50人全員の名前が確認できた。
- (2) 西岡の研究は、留学生の進学先にはほとんど触れていないが、今回の調査では、米国滞在42人（米国経由欧州行を除いた人数）中の37人の留学生（官僚等を除いた人数）に関して、以下24人の就学先が明らかになった。当時の日本人留学生は頻繁に転校した。全ての転校先まで判明したわけではないが、渡米後最初の入学先が判明した点は大きな進歩であると言える。

千村、唐橋、大関、瀬谷、小野、西郷、村田、得能、税所、工藤、三井家7人、赤羽、入江、白根、池田、吉田、高木、百武、計24人⁽⁶⁹⁾。

一方、まだ13人（市来、柴山、大山、鮫島、大和、志道、山沢、井上、田代、梶山、柳井、山本、小谷）の米国での就学先が不明である。

(1)に関しては、今回痛感したのが、史料のクロスチェック（照合）の重要性である。1隻の船の日本人乗客の人数とその名前を確認するのに、*JWM, Alta, San Francisco Chronicle*、吉田清成書簡、三井家留学生関連書簡と5つの史料を照合して、一つの史実に到達した。これほど多くの史料が入手できたのも、インターネット上のデータベース発達の賜物である。

(2)に関しては、今回の調査対象となった日本人米国留学生37人は、大半が英語習得で留学を終えた可能性が高い。

留学生は2年ほど英語を学んで帰国するケースが多く、開拓使留学生、勸農寮留学生、三井家留学生のどれを取っても、本来の目的を遂行できた留学生はほとんどいなかった。

その理由の一つに、明治政府が1873年12月に出した、留学生一括帰国命令がある。1870年、1871年代に渡米した留学生と比較すると、ほとんどの学生は留学期間が短か過ぎ、英語学習に終始した観がある。

年齢構成をみると、渡米留学生37人中、日本出国時の年齢で、現代の中学生（15歳以下）が4人、高校生（16歳以上18歳以下）が11人、大学生（19歳以上22歳以下）が11人、大学卒業以上（23歳以上）が11人という内訳になる。これが1870年、1871年の留学生と比べてどのような差異があるかは、今後確認する必要がある。

中学生年齢の留学生の中で、紙幣印刷における大山の後年の米国も含めた活躍については本論で簡単に触れた。西郷も帰国後しばらくしてから再び渡米し、ジョンズホプキンス大学で学んでいる。帰国命令以後も米国に残った工藤はラトガーズ大学古典学部に進学し卒業した。

高校生以上の年齢では、赤羽も卒業はしなかったが、イェール大学科学部に入学して学んだ。高木もビジネスの専門学校で3年間に渡って専門技術を鍛え後世に活かした。

今回の報告では詳述しないが、ニュージャージー州ミルストンの牧師コーウィン家に単独でホームステイして学んだ日本人留学生、神田乃武、折田彦市、工藤精一郎が皆、大学に入学し卒業した事実から、現代にも通じる理想の留学プロセスが見えてくるかもしれない。

2年間で帰国を余儀なくされた留学生が、米国により長く留まっていたら、どのような実りを見せていたのだろうか。彼らは、明治政府の方針に翻弄された「悲劇」の留学生と言えなくもない。それとも、元々英語学習と現地生活体験が目的で、2年間で十分だったのだろうか。

37人の米国留学生の出身地を見てみると、薩摩藩出身13人、長州藩出身が7人で、藩閥出身者が20人で約半数を占める。商人出身は8人である⁽⁷⁰⁾。

薩摩、長州の藩閥出身の留学生は、米国での足跡が分かっていないケースが多いので分析は時期尚早である。同郷の先輩留学生に薦められて、まずは同郷出身者同士で行動を共にし、米国生活に慣れてから、各自、個別に行動する予定だったのかもしれない。文部省の帰国命令により、その段階に移行する前に帰国となったとも考えられる。

史料には書かれていないが、開拓使と勤農寮留学生に関しては、最初から、藩閥出身者という特権階級に優先的に英語学習と海外生活を体験させることが目的だった可能性も否定できない。

1872年は明治五年で、米国渡航参加メンバーに、まだ藩閥出身者が圧倒的に多いが、かなりの人数の商人も参加している。メンバーの多様性という点で、時代の変化を反映していると言えるかもしれない。この点も1872年以前の留学生と比較検証する必要がある。

今後の課題として、本研究を振り出しに、太平洋航路の船便ごとの日本人渡航者の氏名、人数を確認し、彼らが渡米後、どのような学業、生活を送ったかを調査し、集計を進めていきたい。それが終わった段階で、初めて明治初期米国日本人留学生の基本史料が揃ったと考えていだろう。留学生達の帰国後の日本での活動も、留学の成果を考察する上で詳細に調べる必要がある。研究は第一歩を踏み出したに過ぎない。

最後に、私事で恐縮だが、本稿を、敬愛する先学、西岡淑雄への遅すぎた墓前報告とさせていただきます。

《注》

(1) この成果の原因として、次の3点が挙げられる。

- ① 日本史研究者が米国で史料調査を行い、英語史料を研究で積極的に使用し始めた。
- ② 米国人や中国人研究者が、在米史料等を用いた、日本人、中国人米国留学生研究を進めた。

- ③ 米国のデータベースが急速に発展し、19世紀の米国各地の地元紙が検索できるようになった。さらに、これを活用した、研究者、留学生の子孫の方といった在野の方々による積極的かつ正確な情報収集の成果がインターネット上で公開された。
- (2) 西岡による研究に関しては、自身による「英学史にかかわって60年」(『英学史研究』28号, 1995年, pp.125-135) 参照。西岡は2012年7月20日に逝去された。
- (3) 西岡淑雄「太平洋郵船と英学史」(『英学史研究』25号, 1992年, pp.87-101)。同「明治五年二月十八日横浜発のアメリカ号で渡航した留学生たち」(『英学史研究』26号, 1993年, pp.159-172)。旧暦明治五年二月十八日は、太陽暦の1872年3月26日にあたる。本稿では、主に太陽暦を用い、旧暦の場合は、元号漢数字表記とした。
- (4) 前掲, 西岡1993年, p.169。
- (5) ① 吉田清成より大隈重信, 井上馨宛書簡。大内兵衛・土屋喬雄編『明治前期財政経済史料集成』第10巻(改造社, 1935年, pp.267-8)。
- ② 吉岡吉太郎・野依周吉郎より斎藤純造・三野村利左衛門等4人宛書簡。三井八郎右衛門高棟傳編纂委員会編『三井八郎右衛門高棟傳』(東京大学出版会, 1988年, p.677)。
- ③ サンフランシスコの地元紙 *Weekly Alta California* には、横浜からサンフランシスコに船が入ると、下船客リストが掲載されていた。1872年4月19日の紙面に、前日入港したアメリカ号の下船客リストが掲載されている。
- (6) サンフランシスコ・クロニクルには、不定期に主要なホテルの主なホテル宿泊客の名前が掲載される。アメリカ号が現地に到着した4月18日夜に関しては、4月19日付の紙面で次のような情報が得られる。

HOTEL ARRIVALS

GRAND HOTEL

Sogoi Keyorari, Yoshida, Japan; Otori; Mirami; Honda; Takai; Yamasawa; Yosero; with 40 other Japanese

最後に出てくる Yosero が確定できない。一足先に岩倉使節団と渡米していた大蔵省の吉雄(Yoshio) 永昌が吉田一行をサンフランシスコに迎えに来ていたのだろうか。

この記事によれば、日本人一行は47人となるが、アメリカ号下船客で、グランド・ホテル以外に泊まった日本人もいたと思われる。

- (7) 茂住實男「千村五郎——蕃書調所最初の英学教師」(『日本英語教育史研究』4巻, 1989年, pp.37-57)。
- (8) 岡部一興編, 高谷道男, 有地美子訳『ヘボン在日書簡全集』(教文館, 2009年, p.228)。中島耕二, 辻直人, 大西晴樹共著『長老・改革協会来日宣教師辞典』(新教出版社, 2003年, pp.59-77)。
- (9) 荒船俊太郎「資料紹介 小野梓留学関係資料」(『早稲田学法』1179号, 2010年2月, pp.50-53)。瀬谷に関しては以下の記述がある。「大関は、小野の他に瀬谷小次郎(宇都宮県貫属士族)を随行させている。彼は「増勤公諸士仲間筆順帳」から、旧黒羽藩大目付瀬谷谷兵衛門の孫で「小児性」役を務めた人物だと判明した。瀬谷は大関の側近だったのである。」(p.51)。

なお、インターネットで検索すると、次のブログで大関一行に関する種々の史料の閲覧が可能である。

blog [小野一雄のルーツ] 改訂版(2018年1月日) blog.livedoor.jp/kazu01947/search?q=%E7%80%AC%E8%B0%B7%E5%B0%8F%E6%AC%A1%E9%83%8E (2020年4月18日閲覧) 同ブログの作成者は、小野梓の子孫にあたる方ようだ。膨大な史料が収集され、記述も正確

である。

- (10) 大日方純夫『小野梓——未完のプロジェクト』（富山房インターナショナル、2016年、pp. 40-43）。サミュエル・ロビンス・ブラウン（Samuel Robbins Brown, 1810-1880）は、米国のオランダ改革派教会から派遣された宣教師。
- (11) 前掲、荒船、p. 52。
- (12) 前掲、荒船、p. 52。前掲、大日方、pp. 47-49。
- (13) ウィリアム・D・フレミング「須原屋茂兵衛の『御書籍目録』とイエール大学日本書籍コレクション成立の秘話」（東京大学史料編纂所編『イエール大学所蔵日本関連史料研究と目録』勉誠出版、2016年、pp. 15-28）。兄玉の英語力はかなり高かったことが分かる。
- (14) クラークは同校卒業後、アマースト大学（Amherst College）に進学。ドイツ留学等を経て、1872年にはマサチューセッツ農家大学（Massachusetts Agricultural College）の学長を務めていた。同大学では1871年9月から長州藩出身の内藤誠太郎（1845-1902）が学んでいた。兄玉や大関一行の入学とクラークとの関係を示す史料はまだ発見できていない。
- (15) 以下の史料は、blog.livedoor.jp/kazuo1947/archives/2599574.html（2020年4月18日閲覧）で発見したが、国会図書館が閉鎖中で確認できていない。
《瀬谷小次郎》〔安藤小次郎君 畧傳〕
倉澤瓶城 編著『栃木県人物編』（以文館、1895年）
〔安藤小次郎君 畧傳〕p. 63-64/179
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/778462/1>（2020年4月18日閲覧）

君は舊黒羽藩の少参事《安藤三郎左衛門》氏の次男也、嘉永元年三月 ※嘉永1年3月（1848年4月4日）黒羽田町に生る。戊辰の役黒羽藩の半隊司となり前後数年《福澤諭吉》先生に就き英學を修む。明治四年黒羽作新館四等教官に任ぜられ英學及數學を擔任し藩士の子弟を養成せり。

明治五年※明治5年2月18日（1872年3月26日）故《小野梓》氏等と共に《大関》子爵に随へ北米合衆國に渡航し、ベルモント州ミツトルバリー校及エーストヘンプトン中學校に遊學せしが翌六年※明治6年（1873）4月27日子爵病の爲め歸朝し同家の家令となる。

福澤研究センター編『慶應義塾入社帳』（1986年）を確認したが、瀬谷小次郎、安藤小次郎ともに名前を発見できなかった。

- (16) 北垣宗治「BOSTON PUBLIC LIBRARY 所蔵の日本人名簿（1871-1876）」『英学史研究』（35号、2002年、pp. 111-132）参照。兄玉は1872年9月以降ニューヘイブンに戻った可能性が高い。就学先等は不明。
- (17) 小野の英文の手紙の内容が正しければ、大関と瀬谷は、元大名と従者という封建的上下関係がありながら同じ部屋どころか、同じベッドで寝ていたことになる。この点は疑問だが、いわゆるキング・サイズのベッドであればあり得ないことではない。1876年9月にハーバード大学ロースクールに入学した金子堅太郎と小村寿太郎も、一時期、同じ下宿で一つのベッドで寝ていたという。（高瀬暢彦編註「金子堅太郎自叙伝（2）」『日本大学精神文化研究所紀要』28集、1997年、p. 115）。
- (18) 前掲、大日方、p. 48。この英書は、Albany de Grenier Fonblangue, *How we are governed, or, The crown, the senate, and the bench : a handbook of the constitution, government, laws, and power of Great Britain* ではないか。1869年にロンドンとニューヨークの出版社から発売された版ではないだろうか。158頁の本である。
- (19) 前掲、大日方、p. 49。

- (20) 井上高聡「開拓使による海外留学生派遣意図の変遷」(『北海道大学大学文書館年報』14号, 2019年, pp.1-20)。
- (21) 佐野幸夫『西郷菊次郎と台湾』(南日本新聞開発センター, 2002年, p.31)。恐らく他の薩摩藩出身の開拓使留学生も一緒にこの宣教師から学んでいたと思われる。この宣教師の名前は *JWM, Alta* のリストからは分からない。
- (22) マントゥア・アカデミーの様子に関しては牧野伸顕『回顧録(上)』(中公文庫, 1977年, pp.31-33)に詳しい。校長のヘースティングは、エピスコパリアン派教会の長老の一人で、かなりキリスト教色の濃い学校だったようだ。当時、日本人留学生が通っていた学校は、私立アカデミーでも大学でも同じような環境だった。このようなキリスト教的環境が、若い留学生に与えた精神的影響は無視できないものだったに違いない。
- 薩摩藩留学生の高橋新吉がフェリス(John Mason Ferris, 1825-1911)に書いた手紙(1871年10月21日)から、高橋と前田献吉(1835-1894)が、1871年9月から同校で学んでいたことが分かる。1872年7月21日にフェリス宛に書かれた手紙によると、この年の夏、二人は転校することも考えたが、結局留まることに決めた。
- 高橋と前田は1872年当時、それぞれほぼ30歳と35歳である。この年齢で、米国人の十代の青少年達と一緒に学校で学んでいたケースは珍しい。これらの手紙は、ラトガーズ大学アレグザンダー図書館のグリフィス・コレクションで閲覧可能である。
- 村田十蔵の父の村田新八(1836-1877)は、岩倉使節団の一員として一足先に米国に着き、各地を回っていた。村田がマントゥア・アカデミーを訪問した時、自分の息子をこの学校に入れたいと語ったことを記録した新聞記事(*Philadelphia Inquirer*, 1872年3月21日)がある。村田十蔵等は、この1か月後くらいに到着するので同校で学んだと推定した。確定できる史料は未だ発見されていない。(18770924.web.fc2.com/text/sokuseki/020.html, 2020年4月18日参照)。
- (23) 大久保利謙編『森有礼全集』第3巻(宜文堂書店, 1972年, p.203)。1873年3月14日付、森有礼より、R.A. McClellan, Esq. West Chester Pa. に書かれた手紙。I am very glad that both Sugano and Tokuno are doing well in your school. と書かれている。マクレランはこの学校の校長だろうか。菅野はすでに当時31歳である。
- (24) 板倉創造『一枚の肖像画——折田彦市先生の研究——』(三高同窓会, 1993年, p.50)。薩摩藩留学生の折田彦市は、1872年1月1日から日記をつけていた。これは大変貴重な史料である。三高同窓会本部(内藤幸子訳)で次のように紹介されている。

5月3日(金)晴

何時ものように勉強。郵便局行。庭で労働中のエフィーが3名の日本人来訪を告げるので直ちに室内に入る。田尻に伴われてイチエ、税所の全く予期せざる来訪なり。イチエより故郷の私の家族の様子を聞いたが、家族縁者皆健在とのことを非常に嬉しく思った。税所が当家に滞在することを希望したので、コーウィン先生の許可を求め、許可あり。六時半頃共に駅に行き、税所のトランクを取り家に送る。イチエと田尻は9時頃帰る。

このイチエが**市来**ではないかと推測している。薩摩藩留学生でアナポリス海軍士官学校に入学した松村淳蔵(1842-1919)の変名、市来勘十郎の可能性もある。

- (25) コーウィンに関しては、高橋秀悦『海舟日記に見る 幕末維新のアメリカ留学——日銀総裁富田鐵之助のアメリカ体験』(日本評論社, 2018年)の第3章「ニュージャージー州ミルストーン」、巖平『三高の見果てぬ夢——中等・高等教育成立過程と折田彦市』(思文閣, 2008年)に詳しい。

コーウィンの家（牧師館）には、折田以前に、仙台藩留学生富田鉄之助（1835-1916）、静岡藩留学生神田乃武（1857-1923）もホームステイして、英語やその他の科目の指導を受けていた。また後で触れるが**工藤精一郎**もコーウィン家で2年間ホームステイして学んだ。

神田はマサチューセッツ州アマーストの高校を経てアマースト・カレッジ、折田は現プリンストン大学のニュージャージー・カレッジ、**工藤**はラトガーズ・カレッジに進学し、卒業している。ほとんどの日本人留學生が大学に入学もできなかった状況で、これだけの成果を出したコーウィンの個人指導の効果は絶大だった。

これは推測だが、日本人留學生同士が日本語で会話しないように、夏などの長期休暇以外は、日本人留學生は原則として1人だけ受け入れていたのがよかったのではないか。**税所**も折田との同居を避けるために、9月からウエスト・ニュートンに移動したと思われる。

厳によると、1872年6月には、里帰り中の神田、折田、**工藤**、**税所**の4人がコーウィン家にホームステイしていた。（pp.27-28）

- (26) 前掲、北垣、参照。この学校は日本人留學生に人気があったようで、旧幕臣の日賀田種太郎（1853-1926）、徳川御三卿の清水家の清水篤守（1856-1924）等が学んでいた。クリスチャン・レジスター（*Christian Register*）の1872年9月7日に次のような記述が見える。牧師のJ・H、教員のエドワード、そしてジェームズの3人のアレン兄弟が英語を指導していた。この英語学校に関しては、史料が集まり次第まとめたい。

The West Newton English and Classical School of the Allen Brothers is advertised in another column. The attractions of this unsectarian school have recently been increased by the addition of Rev. J. H. Allen and Prof. Edward A. H. Allen to the corps of teachers. Mr. James T. Allen is about to start for Europe with a party of students.

- (27) William Elliot Griffis, *The Rutgers Graduates in Japan*, Rutgers College, 1916, p. 24.
工藤については以下の通り。

Seiichi Kudo, a native of Tokio, came to New Brunswick in 1872, unable to converse in English. He became a member of the household of Rev. E. T. Corwin, at Millstone, and a member of the Reformed Church. He entered Rutgers College and ranked among the first nine in the class, graduating in the year 1878.

- (28) 三井八郎右衛門高棟傳編纂委員会編『三井八郎右衛門高棟傳』（東京大学出版会、1988年、p.695）。当日の葬儀には、棺を運ぶ車を含めると8台の馬車が連なった。6台目に乗っていたのは、大沢、松平、**志道**、**芝山**と書かれている。大沢と松平に関しては、後出の注(38)を参照。
- (29) 前掲、板倉、p.110。折田の1872年6月5日付の日記には、折田と**税所**がニューブランズウィックに行き、そこで大勢の薩摩藩留學生に会ったことが書かれている。その中には、**市来**、**柴山**、**鮫島**、**南**の名前が含まれている。夏の間は、米国人学生は実家に戻るの、学校の寮が空いている。そこに薩摩藩出身者は滞在していたのかもしれない。**南**は後述する**吉田清成**の随行者だろうか。
- (30) 前掲、板倉、p.114。1874年の折田の手紙のやり取りは、約100通を出して受け取りは約130通で、次第に米国人との文通が増えているという。
- (31) 福澤研究センター編『慶應義塾入社帳』（1986年）参照。
- (32) **大山**の情報は、植村峻『日本紙幣肖像の凹版彫刻者たち』（財団法人印刷朝陽会、2010年）に詳しい。それによると「4年間主に英語などの基礎的な勉強を行いました」とある。他の開拓使留學生よりも、長めに留學し1876年に帰国したことになるが、これは**西郷**等と

ともに1874年2月に帰国したとする史料と一致しない。

帰国後は、開拓使に復帰せず、大蔵省紙幣寮印刷局の幼年技手に採用され、1875年に来日したイタリア人彫刻師エドアルド・キョッソーネ (Eduardo Chiossone, 1833-1898) に師事した。1886年には大蔵省印刷局の官費留学生として、米国財務省・証券印刷局に4年間の研修留学に派遣された。1890年に予定通り帰国した後、翌1891年に、3度目の渡米を個人で実行し、8年間、アメリカン・バンクノート社 (American Bank Note Co.) で正社員として勤務した。

大山の開拓使留学の帰国後の活躍を見ると、最初の2年間の留学は、単なる英語学習だったかもしれないが、学校外で印刷との何らかの関わりを経験していたのではないか。

- (33) 三井八郎右衛門高棟傳編纂委員会編『三井八郎右衛門高棟傳』(東京大学出版会, 1988年)。特に「米国留学関係資料」(pp. 675-722)が重要。
- (34) 同上, pp. 73-77。
- (35) 同上, pp. 55-58。
- (36) 貞次郎の葬儀に参加した教員の名前は、ジーヨンソン、クウーク、ラーイト、バーナレン、コクウーリである。最初のジーヨンソンがジョンソンだろう。小野梓がブルックリンで学んだジョンソンとは別の人物と思われる。
- (37) ニューブランズウィックの地元紙、*The Daily Times* (1873年1月13日)に貞次郎の病死について次のような記事が掲載されていた。

A Japanese student in the Grammar School died at the residence of Prof. Reiley on Thursday last. He will be interred in the Japanese burial ground in the Willow Grove Cemetery. A severe cold was the cause of death.

ウイロー・グロウブ墓地は、ニューブランズウィックの中心部にある墓地で、日下部太郎等日本人留学生在が埋葬されていた。

また、同年1月23日付のミシガン州ジャクソン (Jackson) の *Jackson Daily Citizen* には次のような記事が掲載された。

A young Japanese student named Mitsi died last week at New Brunswick, N. J., and was buried in Willow Grove cemetery, the laws of Japan forbidding the return of subjects who have died abroad.

この記事では、日本では、外国で亡くなった場合の遺体は日本への移送は法的に禁止されているので墓地に土葬された、と書かれている。

この件に関しては、ラトガーズ大学の月刊学生新聞であるターグム (*The Targum*) の1873年1月号の OBITUARY (訃報記事) に、より詳しい記述が見られる。

Takaharu Mitsuzui, more commonly known as Tejaro, died in New Brunswick, Thursday, January 9th, 1873. Always of weak constitution, he, by an imprudent exposure to the snow storm of Christmas, 1872, contracted a severe cold which changed to congestion of the brain, and finally caused his death. The funeral exercise took place at the residence of Prof. Reiley on Hamilton street, on Sunday January 12 and were conducted by Prof. Doolittle and Dr. Campbell. The body, which had previously been embalmed, was placed in the vault of the Cemetery, and will be sent back to Japan in the spring.

Tejaro was born in 1854, at Miaco, the ancient capital of the Mikado, his father being one of the richest — perhaps the richest — merchant in Japan. He had been but seven months in New Brunswick, but in that time had won many friends among his American fellow students. His progress in his studies was excellent, and his death, at the age of nineteen, has cut the thread of a life which promised to be full of usefulness to the country which he had for a time, as he thought, abandoned, but upon which his eyes will never again be opened. He died a stranger in a strange land; but his last illness was cheered by the anxious care of Prof. Reiley and his family, and of Tejaro's own brothers and compatriots. His parents, who still think of him, and plan for him as if living, will not receive the intelligence of his death until about February 15th.

- この記事によると、葬儀は1月12日に、ラトガーズ大学のドゥリトル教授とキャンベル学長によって執り行われた。貞次郎がグラマー・スクールの生徒だったにもかかわらず、大学を挙げて行われた規模のものだったことが分かる。遺体は、前もって消毒・保存処理がなされ、日本への移送まで、墓地の地下貯蔵室のような場所に納められた。入学して7か月しか経っていなかったが、友人も多く、英語も素晴らしい進歩を示していた、と書かれている。
- (38) ラトガーズ大学のグラマー・スクールは、多くの日本人留学生在が学んでいた、1868年-1877年までの *School Catalogue* が発見されていないので、この時期、誰が正式に学んでいたのかが分かっていない。この葬儀参加留学生の多くが同校の生徒だったと思われる。1873年1月の時点では、名古屋藩留学生小川鋪吉、同永井久一郎、同大沢良雄は、ラトガーズ大学グラマー・スクールで学んでいた。大沢と小川は1873年9月からラトガーズ大学科学部に入学が決まっていたが、小川は帰国した。永井のその後の行方は不明である。

原保太郎（1847-1936）は園部藩出身で、1873年9月にラトガーズ大学科学部に入学後、1874年頃渡英した。

錦小路は1871年11月出国、1874年2月6日帰国の自費留学生の公家、錦小路頼言（1851-1884）である。服部敬次郎は、庄内藩出身で、開拓使派遣で1871年1月4日に出国した留学生で、1874年3月に帰国した。二人とも留学先は不明。

松平は、信濃上田藩7代目藩主松平忠礼（1850-1895）か弟の忠厚（1851-1888）と思われる。大塚緩次郎は1872年9月からラトガーズ大学古典学部に入學した。

- (39) 前掲『三井八郎右衛門高棟傳』, p. 701。
- (40) 同上, p. 675。アメリカ号船中で吉岡、野依が書いた手紙に、「紀藩由良氏来て和す」という記述がある。
- (41) William Elliot Griffis, 前掲, p. 25。グリフィスによる三井家留學生に関する記述は以下の通り。グリフィスが直接教えたわけではないし、1872年には、すでにグリフィスは日本にいたので、思い出もない。しかし、このような日本を代表する大企業の御曹司たちが学んでいたことは、記録するに値しただろう。

Yonosuke Mitsi and Yozo Mitsi were connected with the family governing the great commercial house of that name in Japan, which has agencies in most of the large cities of the world, spent some time at New Brunswick as students. On going back to Japan, they entered the banking business in Kioto.

- (42) 國雄行『近代日本と農政 — 明治前期の勸農政策』(岩田書院, 2018年, pp. 72-73)。
- (43) *Catalogue of the officers and cadets of the Highland Military Academy, Worcester, MA from 1856 to 1875*, Worcester, 1875。この年は、同校では、福岡藩留學生井上六三郎（1851-

- 1879)、佐土原藩留学生島津又之進(1849-1909)、佐倉藩留学生堀田璋之助(1852-1875)も学んでいる。
- (44) 1875年4月から7月にかけて、イエール大学在学中の**赤羽**と1874年からワシントン駐在公使の任に着いた**吉田清成**の間でやり取りされた11通の書簡が、京都大学文学部日本史研究室編『吉田清成関係文書四』(書翰篇4, 思文閣, 2008年)に収録されている。**吉田**に送金を要求、またそのお礼といった内容が多い。
- 赤羽**が個人的に親しくしていた日本人留学生に、佐土原藩出身の島津(町田)啓次郎(1857-1877)がいる。島津は、メリーランド州のアナポリスの海軍士官学校(U.S. Naval Academy)に入学を許可されたが、成績不振、素行不良などで問題になった時期があった。**赤羽**は1875年5月頃、島津と共に不真面目な生活を送っているのではないかと、一日本人留学生から指摘されている。島津啓次郎の留学に関しては、拙稿「島津啓次郎——西南戦争に散った二〇歳の米国留学生、佐土原藩主三男の米国での「出会い」」(『青淵』2020年3月, pp.30-32)参照。
- (45) 1875年3月10日付けの**山沢**から**吉田清成**へ宛てた書簡、前掲『吉田清成関係文書四』書翰篇4, p.396によると、**山沢**は1875年2月に横浜を出航し、フランスに向かった。目的は、日本人陸軍留学生徒取締と書かれている。
- (46) 小林功芳『英学と宣教の諸相』(有隣堂, 2000年, p.47)。
- (47) 1875年2月2日付けの**吉田清成**から富田鉄之助宛書簡、前掲『吉田清成関係文書四』書翰篇4, p.20参照。
- (48) 前掲『森有礼全集』, p.95, p.102。
- (49) 例えば、1875年3月21日付けの吉田清成から寺島宗則宛書簡、前掲『吉田清成関係文書四』書翰篇4, p.44を参照。ワシントンDCの公使館職員の様子を報告している箇所「田代も勉強に有之候」と記している。**吉田清成**は外債募集の目的で、渡米、渡英した後、帰国。その後、駐米国公使に任命され、1874年12月16日米国の首都に戻ってきた。
- (50) 小出潔「特命全権大使・米欧回覧と由良守応」『由良町の文化財』(41号, 2014年, pp.63-69)。由良町中央公民館図書館より提供していただいた。
- (51) 同上, p.66。
- (52) 同上, p.63。
- (53) 同上, p.66。
- (54) 前掲、北垣を参照。
- (55) 当時、欧米の農業の実態を調査していた、薩摩藩出身の岩山敬義(1839-1892)と部分的に行動を共にしていた可能性はある。前出の木戸孝允の日記によると、**由良**は岩山と木戸を訪問している。
- (56) 國, 前掲, p.73。**由良**は、帰国時に牛22頭と綿羊27頭を船で運んだと、國は記している。また、**吉田清成**がサンフランシスコで牛15頭、羊20頭を、フィラデルフィアで測量機械と農具を購入して日本に送ったが、この際、**由良**が補佐したと、國は推測している。
- (57) **由良**の貢献に関しては、前掲、國, p.96の註(46), (47)を参照。
- (58) 鈴木栄樹「最後の彦根藩主井伊直憲の西洋遊学——一大名華族の西洋体験」(佐々木克編『幕末維新の彦根藩』彦根城博物館叢書1, 2001年, 彦根市教育委員会, p.214)。
- (59) 田中智子「幕末維新期のアメリカ留学: 吉田清成を中心に」(山本四郎編『日本近代国家の形成と展開』吉川弘文館, 1996年, pp.2-36)。
- (60) 国吉栄『森有礼が切り拓いた日米外交 初代駐米外交官の挑戦』(勉誠出版, 2018年, p.98)によると、同じ薩摩藩英国留学生の森有礼が、初代駐米外交官として米国に赴任することを知り、「森に遅れをとることを恐れて、学業を捨てて急ぎ帰国した可能性がきわめて高い」と推測している。その後、1872年4月にアメリカ号で米国に外債募集に来た**吉田**は、

ワシントンで森の反対に会うことになる。

- (61) 南と薩摩藩留学生等との1872年夏の間の交流の可能性に関しては、前出の註(29)参照。
- (62) (<https://www.city.kuwana.lg.jp/index.cfm/24,11184,234,407,html>, 2020年4月20日閲覧)。
- (63) 高木が1875年1月24日付で、吉田清成に書いた手紙によると、当時の高木の住所は、882 Broad St., Newark となっている。この手紙には1875年4月か5月に帰国し、商法講習所で助教として勤務する旨が書かれている。(前掲『吉田清成関係文書4 書翰篇4』, pp. 350-351)。
- (64) 福本龍『明治五・六年 大鳥圭介の英・米産業視察日記』(図書刊行会, 2007年)。大鳥は、この海外出張中、日記を書いているが、最初の日付が1872年9月25日であり、渡米後しばらくの間の記述は無い。
- (65) 1870年、貨幣、銀行制度調査目的の伊藤博文の渡米に、実業家として同行した、大阪出身の百武安兵衛がいる。安兵衛は翌1871年に帰国するが、製紙機械を輸入して帰国したと言われる。帰国後製紙会社設立を企てたが破産により果たし得なかった。(kami.jp/日本の近代製紙工業のはじまり/, 2020年4月20日閲覧)。百武安兵衛は両替商平野家の分家であるので、百武安二郎と血縁関係がありそうだ。
- (66) 前掲、『三井八郎右衛門高棟傳』, p. 677。「市民百武安二郎 是は大坂伏見町平野屋のよし」と書かれている。
- (67) Edward J. M. Rhoads, *Stepping Forth into the World*, Hong Kong University Press, 2011, p. 109.
- (68) 前掲、『森有礼全集』第三卷, p. 89.
- (69) 24人の留学生の留学先

* [] 内は州名を表わす。NJ: ニュージャージー州, MA: マサチューセッツ州, NY: ニューヨーク州, CT: コネチカット州, IL: イリノイ州, VT: ヴァーモント州, PA: ペンシルヴェニア州)

・大学卒業

工藤精一郎: コーウィンの個人指導 (2年) [NJ] →ラトガーズ大学古典学部 (4年) [NJ] 卒業

・大学中退

赤羽四郎: ハイランド・ミリタリー・アカデミー (1, 2か月) [MA] →不明 (2年) →イエール大学科学部 (1年) [CT]

・私立アカデミーで英語学習

白根鼎蔵: ハイランド・ミリタリー・アカデミー (1, 2か月) [MA] →不明

入江音次郎: ハイランド・ミリタリー・アカデミー (1, 2か月) [MA] →不明 (1年) →ニューヨーク市で病死

池田猪之助: モンソン・アカデミー英語科 (1, 2か月) 古典科 (2年) [MA]

吉田慶蔵: モンソン・アカデミー (1年個人指導, 1年英語科) [MA]

百武安二郎: 不明→ウエズレイヤン・アカデミー (1年) [MA]

大関増勤: ウィリントン・セミナリー (1年) [MA]

瀬谷小次郎: ウィリントン・セミナリー (1年) [MA] →ミドルベリーの学校 (不明) [VT]

小野梓: ウィリントン・セミナリー (1年) [MA] →ブルックリンで個人指導 (不明) [NY]

唐橋在定: ウィリントン・セミナリー (1年?) [MA]

税所長八: コーウィンの個人指導 (3か月) [NJ] →ウエストニュートン・イングリッ

シュ&クラシカル・スクール (1 年半) [MA]

村田十蔵：マントゥア・アカデミー (2 年) [PA]

西郷菊次郎：フィラデルフィア近郊の学校 (2 年) [PA]

得能新二郎：ウエスト・チェスターの学校 (2 年) [PA]

三井家留学生 7 人：ラトガーズカレッジ・グラマースクール (2 年) [NJ],

* 貞次郎半年後に病死、養之助約 1 年で帰国。武之助最後の半年をエリザベス [NJ],

長四郎と吉岡最後の半年をローウェー [NJ]

・専門分野を修める学校

高木貞作：ブライアント・ストラットン・アンド・ホイットニー・ビジネス・カレッジ (3 年) [NJ]

千村五郎：プレズビテリアン・セオロジカル・セミナリー・シカゴ (1 年) [IL]

(70) 三井貞次郎の葬儀に参加した井伊直助は京都の西京為替会社から派遣された留学生である。

井伊は 1870 年頃から米国に滞在し、1873 年春頃からニューヨークの銀行で見習いを始めた。前掲『三井八郎右衛門高棟傳』(pp. 99-100)によると、当時、関西の為替会社から 3, 4 人米国に派遣されていたという。三井の縁戚にあたる大阪の加島屋広岡家の手代もニューヨークに留学していた。士族以外の商人の留学が既に活発に行われていたことが分かる。

参考文献

【単行本、著作】

板倉創造『一枚の肖像画 — 折田彦市先生の研究』(三高同窓会, 1993 年)

植村峻『日本紙幣肖像の凹版彫刻者たち』(財団法人 印刷朝陽会, 2010 年)

大日方純夫『小野梓 — 未完のプロジェクト』(富山房インターナショナル, 2016 年)

巖平『三高の見果てぬ夢 — 中等・高等教育成立過程と折田彦市』(思文閣, 2008 年)

國雄行『近代日本と農政 — 明治前期の勸農政策』(岩田書院, 2018 年)

国吉栄『森有礼が切り拓いた日米外交 初代駐米外交官の挑戦』(勉誠出版, 2018 年)

小林功芳『英学と宣教の諸相』(有隣堂, 2000 年)

佐野幸夫『菊次郎と台湾』(南日本新聞開発センター, 2002 年)

塩崎智『アメリカ知日派の起源 — 明治の留学生交流譚』(平凡社選書, 2001 年)

高木不二『幕末維新期の米国留学 — 横井左平太の海軍修学』(慶應義塾大学出版会, 2015 年)

高橋秀悦『海舟日記に見る幕末維新のアメリカ留学』(日本評論社, 2018 年)

福本龍『明治五・六年 大鳥圭介の英・米産業視察日記』(図書刊行会, 2007 年)

牧野伸顕『回顧録 (上)』(中公文庫, 1977 年)

三井八郎右衛門高棟傳編纂委員会編纂『三井八郎右衛門高棟傳』(東京大学出版会, 1988 年)

Edward J. M. Rhoads, *Stepping Forth into the World*, Hong Kong University Press, 2011

【辞典、史料集等】

大内兵衛・土屋喬雄編『明治前期財政経済史料集成』第 10 卷 (改造社, 1935 年)

大久保利謙編『森有礼全集』第 3 卷 (宜文堂書店, 1972 年)

岡部一興編, 高谷道男・有地美子訳『ヘボン在日書簡全集』(教文館, 2009 年)

京都大学文学部日本史研究室編『吉田清成関係文書四』書翰篇 4 (思文閣, 2008 年)

手塚晃・国立教育会館編『幕末維新海外渡航者総覧』(柏書房, 2007 年)

中島耕二・辻直人・大西晴樹共著『長老・改革協会来日宣教師辞典』(新教出版社, 2003 年)

福澤研究センター編『慶應義塾入社帳』(1986 年)

宮地正人監修『国際人事典 — 幕末・維新 —』(毎日コミュニケーションズ, 1991 年)

【インターネット上の URL, ブログ等】

- ・「blog [小野一雄のルーツ] 改訂版 (2018年1月日)」blog.livedoor.jp/kazuol1947/search?q=%E7%80%AC%E8%B0%B7%E5%B0%8F%E6%AC%A1%E9%83%8E (2020年4月18日閲覧)
- ・「余光を追って 幕末明治薩摩, 村田新八のを中心に」18770924.web.fc2.com/text/sokuseki/020.html (2020年4月18日閲覧)
- ・日本の近代製紙工業のはじまり」kami.jp/日本の近代製紙工業のはじまり/ (2020年4月20日閲覧)
- ・「桑名史上の人たち(8) — 高木貞作(たかぎ ていさく) —」https://www.city.kuwana.lg.jp/index.cfm/24,11184,234,407,html (2020年4月20日閲覧)

【論文】

・西岡淑雄による基調論文

西岡淑雄「太平洋郵船と英学史」(『英学史研究』25号, 1992年, pp.87-101)

同「明治五年二月十八日横浜発のアメリカ号で渡航した留学生たち」(『英学史研究』26号, 1993年, pp.159-172)

・その他の論文

荒船俊太郎「資料紹介 — 小野梓留学関係資料」(『早稲田学報』1179号, 2010年2月, pp.50-53)

井上高聡「開拓使による海外留学生派遣意図の変遷」(『北海道大学大学図書館年報』14号, 2019年, pp.1-20)

ウィリアム・D・フレミング「須原屋茂兵衛の『御書籍目録』とイエール大学日本書籍コレクション成立の秘話」(東京大学史料編纂所編『イエール大学所蔵日本関連史料研究と目録』勉誠出版, 2016年, pp.15-28)

小出潔「特命全権大使・米欧回覧と由良守応」(『由良町の文化財』41号, 2014年, pp.63-69)

北垣宗治「BOSTON PUBLIC LIBRARY 所蔵の日本人名簿 (1871-1876)」(『英学史研究』35号, 2002年, pp.111-132)

北口由望「明治初期のイエール大学日本人留学生 — 田尻稲次郎が学んだカリキュラムを中心に —」(『専修大学史紀要』6巻, 2014年, pp.126-142)

塩崎智「島津啓次郎 — 西南戦争に散った二〇歳の米国留学生, 佐土原藩主三男の米国での「出会い」, (『青淵』852号, 2020年3月, pp.30-32)

鈴木栄樹「最後の彦根藩主井伊直憲の西洋遊学 — 一大名華族の西洋体験」(佐々木克編『幕末維新の彦根藩』彦根城博物館叢書1, 2001年, 彦根市教育委員会, pp.209-240)

高瀬暢彦編註「金子堅太郎自叙伝(2)」(『日本大学精神文化研究所紀要』28集, 1997年, pp.73-137)

田中智子「幕末維新期のアメリカ留学 — 吉田清成を中心に —」(山本四郎編『日本近代国家の形成と展開』(吉川弘文館, 1996年, pp.2-36)

西岡淑雄「英学史にかかわって60年」(『英学史研究』28号, 1995年, pp.125-135)

茂住實男「千村五郎 — 蕃書調所最初の英学教師」(『日本英語教育史研究』4号, 1989年, pp.37-57)

William Elliot Griffis, *The Rutgers Graduates in Japan, Revised and Enlarged and Republished at the 150th Anniversary of the College., Rutgers college, 1916. An Address Delivered in Kirkpatrick Chapel*, (Rutgers College, June 16, 1885)

(原稿受付 2020年6月23日)